

名付けえぬ風景をめざして：デザイン実践の現場から

学位論文内容の要旨

本論文は、長年にわたり風景デザインの現場で働き、現在も風景デザイナーとしての業務に従事する片桐氏が、専門家においても説明しがたい風景の魅力を、風景の作られる現場におけるデザイナーの実践過程に注目することによって、明らかにしようとしたものである。本論文の前半部では、近代社会における風景の成立や日本への導入過程、文化・社会人類学における数多くの空間理論や事例研究が紹介され、多くの人文社会科学における風景研究が、科学技術の対象としての風景にたいして、風景の社会・文化的側面を積極的に評価し、あるいは対峙させてきた事が明らかにされる。しかし片桐氏によれば、「名付けえぬ風景」の魅力には、エリック・ハーシュの風景モデルが明らかにした、科学技術や社会・文化の対象としての前景と不可分であるにもかかわらず、名付けることが困難な背景の問題が深く関わっており、従来のアプローチでは風景の魅力を分析することは困難であるとされる。そのような問題点を再検討するために、後半部では公園を中心にしたランドスケープデザインと、都市の一角におけるサウンドスケープデザインという対照的な事例が、デザイナーの実践過程に焦点を当てて分析される。そこで片桐氏は、アルフレッド・ジェルがアートの創作過程におけるエージェンシーに注目したモデルを用い、これらの事例における風景デザイナーにおいては、何れの事例においても、従来の科学技術や文化としての風景デザインの過程と、名付け得ぬ魅力を生み出そうとするデザイン過程が交錯し、並行して見られることを明らかにしている。

このような論文構成のもとに、第一章では、風景の魅力はどのように研究されてきたかが検討される。数多くの民族誌を調査すると、文化・社会人類学は、科学技術の合理性だけでは説明がつかない風景の秩序を、文化や社会の側面から明らかにしてきた事が明らかになる。数少ない風景デザインの研究においても、合理性ゆえの画一性が批判されたのちは、文化的な側面が注目された。しかし風景には、文化とされる枠組みでは説明できないものが多くあり、それは風景がハーシュのデザイン論における前景と背景からなるためであるとされる。そこで、作られた形を科学技術や文化に還元して解釈するのではなく、風景が作られる過程を理解することが重要であることが指摘される。また第二章では、風景が作られる過程を扱った先行研究や科学技術研究の諸理論が検討され、この中でもデザイン過程を対象とする手法が注目された。風景デザインでは、作られるべき形が不明なまま、デザインの作業が進んでいく場合があるが、この不明な形が名付けえぬ魅力を生みだす。この過程において、デザイン図面を作成するデザイナーを含めて、作業に関わる様々な人やモノの関わりを明らかにすることによって、名付けえぬ魅力が生みだされる過程が明らかになるとされ、その過程を理解する理論としてジェルのアートとエージェンシーに

関する理論が紹介される。さらに第三章では、片桐氏が実際に経験してきたランドスケープデザインの現場における事例が研究される。ランドスケープデザインは公共事業ゆえに合理性がめざされ、デザイナーたちは科学技術や住民の期待する文化を形に反映させることによって、よりよいものを作ろうとする。その過程では設計図面の書きなおしという試行錯誤が繰り返される。これらの形や設計図面を検討すると、技術的に説明可能な側面と同時に、現代芸術作品のデザインとも類似した表現過程が含まれている。この形は全体のレイアウトや、目立たないところに配置される施設などに見受けられ、この形は合理的に解釈される形態を持つと同時に、名付けえぬ魅力が背景として表現されたものであるとされる。さらに第四章では、公共事業としてのランドスケープデザインとは違い、合理的な効果や機能が期待される事の少ない、サウンドスケープデザインの事例が研究された。サウンドスケープデザインは、音も風景を構成していると考え、音を使って風景をデザインするものである。片桐氏によると、このデザイン過程において、デザイナーたちは現地の風景に調和する音や、鑑賞の対象となるような音楽作品、つまり説明できるデザインを避けていることが観察された。片桐氏によると、この形は芸術のように鑑賞されるものとしてではなく、周囲のなかで気づく程度のもので風景の中に存在する必要があった。しかしその一方で、サウンドスケープデザインにおいても専門家としての装置の配置やクライアントへの説明などが行われている。そして第五章は事例の比較を行い、名付けえぬ魅力が作られようとする過程が考察された。従来の研究においては、風景は、科学技術や文化といった何らかの秩序が反映されたものとされてきた。しかし、事例によって明らかになったのは、何れの場合も、ハーシュの前景としての風景デザインとしてだけでなく、説明しきれない形態や気づきのためのデザインが行われ、名付けがたい魅力が生みだされていることである。これまでの人類学は、風景の魅力の理由として社会や文化と呼ばれる秩序を求めた。しかし、風景づくりにおいては、デザイナーは科学技術や文化を手がかりにする一方で、それらを越えた魅力を作ろうと試行錯誤している。このように本論文では、デザインの実践過程における参与観察の手法を用いることが有効なアプローチであることが明らかにされた。またこの実践論的視点は、風景を考える上で、文化人類学のみならず、風景デザイン研究にも寄与するものとされる。

このように本論文は、文化・社会人類学における世界各地の民族誌から、住居や広場などの空間配置の問題を初めて包括的に整理し、風景デザインにおいて範例とされてきた西洋的空間配置を相対化している。また、これまでの社会や文化に焦点を当てた人類学研究にたいして、専門家による風景デザインという新たな研究対象を取り上げ、調査事例においては、風景が生みだされる過程における、住民やクライアントなどのエージェントとの間で揺れ動く風景デザイナーの実践に焦点を当てている点は、風景デザイナーとしてデザイン現場の内側を詳細に観察することが可能な片桐氏ならではの研究成果となっている。さらに本論文の一部は、4編の学術論文として学会誌に掲載されているように、近年の人類学において関心の高い実践論研究の一端としても先進的で水準の高さを示している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宮 武 公 夫
副 査 教 授 栗 山 敬 己
副 査 教 授 北 村 清 彦

学 位 論 文 題 名

名付けえぬ風景をめざして：デザイン実践の現場から

2010年11月30日に片桐保昭氏より提出された学位論文「名付けえぬ風景をめざして：デザイン実践の現場から」の審査に関し、2010年12月17日開催の教授会において学位論文審査委員会が発足した。同年12月22日に第1回審査委員会を開催し、各審査担当者に提出論文を配布し、その後の審査日程についての調整を行った。その結果、2011年2月1日に第2回審査委員会を開催し、論文内容の検討と問題点の整理を行い、出された意見をもとに主査の宮武がまとめた疑問点や問題点に関する資料を作成し、各審査担当者に配布すると共に、口頭試験の際の質問内容についての確認を行った。

それらの検討内容と問題点を踏まえて、同年2月4日に申請者にたいする口頭試験を実施した。また口頭試験の終了直後に第3回審査委員会を開催し、口頭試験の内容検討と学位授与に関する判定を行った。提出された論文内容と口頭試験の結果に関する委員会の所見は以下の通りである。

本論文は、文化・社会人類学における世界各地の民族誌から、住居や広場などの空間配置の問題を初めて包括的に整理し、風景デザインにおいて範例とされてきた西洋的空間配置を相対化した点が評価される。また、これまでの社会や文化に焦点を当てた人類学研究にたいして、専門家による風景デザインという新たな研究対象を取り上げ、調査事例においては、風景が生みだされる過程における、住民やクライアントなどのエージェントとの間で揺れ動く風景デザイナーの実践に焦点を当てている点は、風景デザイナーとしてデザイン現場の内側を詳細に観察することが可能な片桐氏ならではの研究成果として高く評価された。また、この研究は、近年の人類学において関心の高い実践論研究の一端としても、先進的で重要なものと評価され、本論文の一部は、査読付きを含む4編の学術論文として学会誌に掲載されており、本論文の水準の高さを示していると判断される。

しかし、このような評価の一方で、デザイン過程において風景デザイナーの視点が重視され、他の住民や施工者などとの関係についての記述が不十分であるという指摘が審査委員からなされた。また、いくつかの重要な概念定義が明確でない点や、従来的人类学研究における文化や参与観察といった重要な概念と、科学技術研究における理論的、方法論的

関係が手短にしか述べられていない点など、従来の非西洋世界を中心に文化人類学研究を行ってきた多くの人類学者を対象にするには改善すべき点も指摘された。しかし、これらの問題点の多くは、本論文が現代日本における風景デザイナーの実践をその研究の焦点とするためであり、いずれも本論文の価値を損なうものではないと判断された。このような審査結果に基づき、審査委員会は全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与する事が妥当であるとの結論に達した。

このような学位授与に関する判定にもとづき、同年2月8日に第4回審査委員会を開催し、審査結果報告書の素案についての検討と確認を行った。その結果、若干の修正を行った審査報告書を同年2月14日開催の第5回審査委員会にて最終報告書として確認し、同年2月21日開催の教授会において審査結果の報告を行った。